
緋弾のアリア 魔剣の守護者

杉崎達也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア 魔剣の守護者

【Zコード】

N4152BA

【作者名】

杉崎達也

【あらすじ】

もしもジャンヌに恋人がいたら・・・

そんな作者の妄想から生まれた、二次創作。

イ・ウーに拾われ育てられた少年は守りたいものを守れるのか？

運命の歯車が今動きはじめる！

これが作者の処女作となります。

また、文才皆無ですが多くの方に読んでいただけたらな〜、と思います。

あと原作を知っているとこう前提で書きますんでよろしくお願ひします。

४०

第一話

俺、市原文やは今日から”パリ武偵高からきた留学生、強襲科2年の△ランク武偵”になつた。

――――――――――

俺は教務科に書類を渡して教室に向かつた。

先生に軽く紹介され理子の隣の席になつた。理子の隣の席はやめてくれと思つたね。早速ふーみんとかいうあだ名付けられたし……。
とか思つていると後ろの扉が開いて男子生徒が入つてきた。

「すいません、ちょっと事情があつて遅れました」

入つてきたのは遠山キンジだつた。超人ランクのランカーツて聞いてたけど根暗つぽいな」とか思つていると

「あたしあいつの隣がいい」

俺の後に紹介された神崎・Hアリア、今その紹介が終わり先生が「えへ、神崎さんの席は……」とか言つてるときに遠山が来てアリアが告げた。

俺が、そういうえば神崎は△ランク武偵なのにどうして△ランクの隣にとか考へてゐる間にクラスはアリアの発言に盛り上がりつていた。

「な、なんでだよ・・・！」

遠山は頭を抱えてすゞしく悩んでいた。

俺は遠山達を暖かく見守ることにしようと

「よ、良かつたなキンジ！なんか知らんがお前にも春が来たみたいだぞ！先生！オレ、転入生さんと席変わりますよ！」

遠山の右隣に座つていた武藤が満面の笑みで席を立つ。

先生は先生で「最近の女子は積極的ね」とか言つて武藤の提案に即OKを出す。

わーわー。ぱちぱち。

教室の中で拍手が始まる中、アリア、

「キンジ、これ。さつきのベルト」

とか言つて遠山にベルトを投げると理子が

、「理子分かつた！分かつちやた！・これフラグばっさばきに立つて
るよ！」

と言つて ガタン！ と席を立つ、

「キーくんベルトしてない！そしてそのベルトをツインテールさんが持つてた！これ謎でしょ！？」でも理子には推理できた！できちやつた！」

理子は武慎高ではおバカキャラで通しているが、ウラでは結構黒かつたりする。ちなみにロリータが好きなのは素だ。

「キーくんは彼女の前でベルトを取るような何らかの行為をした！そして彼女の部屋にベルトを忘れてきた！つまり2人は・熱い熱い、恋愛の真つ最中なんだよ！」

と、おバカ推理を披露する。

恋つておいと俺は思つたがそこは武慎高、教室が盛り上がるわ盛り上がるわ

「キ、キンジがこんなカワイイ子をいつの間に！？」 「女子どころか他人に興味なさそうなくせに、裏でそんなことを…？」 「フケツ！」

とかその他いろいろと盛り上がる中、問題のアリアが一丁の拳銃を抜きざまに撃ち

すぎゅぎゅん！

と鳴り響いた銃声が教室を凍り付かせた

「れ、恋愛だなんて・・・くつだらない！」

広げた両腕の先の左右の壁には1発ずつ穴が空いていた。

チンチンチーン・・・

拳銃から排出された空薬莢が床に落ちて、静けさを際立たせた。理子は俺の隣で震えながら着席。

さすがSランク武僧、容赦なく発砲しやがる。

「全員覚えておきなさい！そういうバカなこと言ひやつには - 風穴
あけるわよ！」

神崎・H・アリアの自己紹介は強く印象に残るものになった。

昼休みになると質問責めにあつてている遠山を横目に俺は、探偵科棟の屋上に、転入前に頼んだ神崎と遠山の情報をもらひにせつてきた。

「文也様」

声がした方を見ると飛鳥が立っていた。

フルネームは椎橋飛鳥(しいばしあすか)。俺と同じくイ・ワーに所属しているが、武偵高には1年から入学している探偵科の2年生だ。

そして情報収集能力が高く俺がよくつかう信頼出来る情報屋でもある。

「飛鳥、頼んでおいた情報は？」

「いじりです」

その手にはいつの間にか紙の束があった。

「ああ、ありがとうございます」

俺は資料を受け取りながら飛鳥の頭を撫でてやる。

「ありがとうございます。しかし私にこのよつなことをしているとまたジャンヌ様が拗ねてしましますよ？」

「仕方がないだろ昔からの癖なんだから、それにジャンヌもこれべらいじやあ拗ねないだろ」

とは言ったものの本当は結構不安だ。

とりあえずジャンヌの心配は後回しにして、一通り資料を見る。そこには身長や体重から、裏での評価まで2人の様々な情報が事細かに書いてあった。

「ああ、問題無い流石だな、飛鳥」

用がすんだ俺と飛鳥は教室に戻つてこつた。

— · — · — · — ·

ピンポン

俺は今日から住むことになる部屋のベルを鳴らすとドアが開いて遠山が出てきた。

「あんたが今日から一緒に住む市原文也か?」

「ああ、そうだ。あと俺のことのは文也でこい。みひじくな遠山」

「じゃあ俺のこともキンジでいい。よろしくな文也」

その後、荷物を運び込んだ俺は、キンジと早めの夕食をすませようとしたのだが、キンジはいつも下にある「コンビニ」で食事を済ませているようで食材が少なかつたので、とりあえずカレーで夕食をすませた。

ピンポン

俺とキンジがテレビを見ながら駄弁つていると部屋のベルが鳴った。

ピンポンピンポン

「おこキンジ出なくていいのか？」

「今日はもう寝たいから出なくていい

ビボビボビボビビビビビビンポン！ビボビボビンポン！

出なくていいのか?#ンシ

「・・・」
譲だよ

さすがに五月蠅かったらしく、キンジが嫌そうに開けたドアの先には

「遅い！あたしがチャイムを押したら5秒以内に出る」と…」

神崎・H・アリアが立っていた。

一話（後書き）

感想や評価をお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4152ba/>

緋弾のアリア 魔剣の守護者

2012年1月14日22時56分発行